



TITLE:

温泉と佛教

AUTHOR(S):

石川, 成章

CITATION:

石川, 成章. 温泉と佛教. 地球 1924, 2(1): 205-206

ISSUE DATE:

1924-07-01

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/182700>

RIGHT:

につくて、創立年代、祭神、本地佛等に關して御承知の方があれば御叱正や御教示に預りたい

と思ふ。もしそれが出来るならば、筆者望外の幸である。(大正十三・六・三)

溫泉と佛教

石川成章

本邦各地の有名な溫泉場には大抵寺があつて其大多數は、眞言宗に屬し、本尊は藥師如來が多く、傳説に因る溫泉の開祖は、行基か弘法の様な高僧が多い、元來佛教は熱帶の印度に起つた宗教で、印度人は昔から河水に浴して身心を清むる習慣があつて、彼のガンガ河(恒河)の如きは神聖な處として、現今でも一日に幾度か河水に浴して身を清めるといふことは、印度佛教徒の熱心に實行して居る修行の一つである、昔釋迦も其修行の最中に尼連禪河に浴して身を清め、心機一轉して更に菩提樹下の修行にかゝられたと傳へて居る、斯く印度には昔から入浴の

習慣が旺盛であり、又熱帶地方に於ける炎熱の關係からいふても、水浴といふ事は生活上必要なことに相違ない、故に佛經には身心洗滌のことが處々に説かれてある、日本に於ても神代から「ミソギ」といふ事があつて神に奉仕するには先づ以て沐浴して身心を清むるといふ習慣があつた。此習慣が印度以來の佛教に於ける修行の方式と調和し合體して、愈々確乎不拔のものとなつたもので、今でも神や佛に奉仕するには必ず齋戒沐浴して身心を淨むる事に爲つて居る、眞言宗には灌頂といふて、法水を受者の頂に灌ぐ法式があつて、耶蘇教の洗禮に似て居る、其

他華嚴宗でも天台宗でも禪宗でも沐浴といふ事は重要な事に爲つて居て、東大寺でも大徳寺でも南禪寺でも相國寺でも何れも立派な浴室が昔から建てられてある、寺の設備の完全なのは七堂伽藍といふが其中に浴室は缺くべからざる一堂である、この七堂伽藍の設備は印度から支那、支那から朝鮮、朝鮮から日本と傳はつたもので、支那に於ても佛教では沐浴を重要視したものである、かく佛教では沐浴を重んずるから日本に於て温泉の多數が皆高僧の發見として傳へられて居るに何の不思議もない、温泉に藥師如來を本尊とする寺の多いのは靈泉がよく難病を治するといふ關係からであるのは勿論で、瀑布に不動尊や觀世音が多く祭りてあるのは、觀音の三十三體の中に、龍頭、瀧見、水月、瀧水の如き姿があり、不動尊は大忿怒の相を水火の中に現じて、能く一切の煩惱を斷盡し、惡魔外道を降伏する威徳に因^{チテ}んだものである。

無量壽經中極樂淨土の莊嚴を示す處に左の如き寶池と菩薩の沐浴が説てある。

内外左右。有^ニ諸浴池。或^ハ十由旬。或^ハ二十三十乃至百千由旬、縱橫深淺各皆一等、八功德水、湛然盈滿、清淨香潔、味如甘露、^{中略}彼諸菩薩、及聲聞衆。若^ハ入寶池、意欲^ニ令^ニ水沒^ニ足、水即沒足、欲^ニ令^ニ至膝、即至于膝、欲^ニ令^ニ至腰、水即至腰、欲^ニ令^ニ至頸、水即至頸、欲^ニ令^ニ灌身、自然灌身、欲^ニ令^ニ還復、水輒還復、調和冷暖、自然隨意、開^ニ神悅體、蕩除心垢、是宛然溫泉の功能書きである。

されば沐浴によりて心身の苦惱を脱却し、垢汚を蕩除する事は、元來佛教の重要しする處であつた、溫泉浴の如きも佛教によりて獎勵せられた事が決して尠くないと信ずるから、本誌の餘白を借りて聊か我道引湯を試みたのである。

(完)